

書評 岸政彦・打越正行・上原健太郎・上間陽子 著
「地元を生きる 沖縄的共同性の社会学」
(ナカニシヤ出版、2020、439ページ、定価3,200円＋税)

宮 平 隆 央
MIYAHIRA Takao

本書は、岸政彦、打越正行、上原健太郎、上間陽子らによって行われた8年に渉る研究をまとめ上げた「沖縄社会の内部の多様性を描く、社会学的エスノグラフィ」(序文、1P)である。

各著書はそれぞれに、『同化と他者化－戦後沖縄の本土就職者たち－』(岸)、『ヤンキーと地元－解体屋、風俗経営者、ヤミ業者になった沖縄の若者たち』(打越)、『「間断のある移行」に関する教育社会学的研究－「オキナワ型雇用社会」に参入する若者たち－』(上原)、『裸足で逃げる－沖縄の夜の街の少女たち』(上間)などの研究によって、それぞれがそれぞれの立場・関心から、一般的にイメージされる「沖縄的なもの」とのズレや異質さをはらむ、沖縄の人々の生活を描き出してきた。

本書においては、それぞれの著者が研究の過程で出会ったさまざまな「地元で生きる」人々の生活が、そこではまとまりつつ、かしこでは線引きされつつ、形作られるモザイクのような沖縄という社会の姿を示している。

「階層性」「ジェンダー」という視点を導入することにより、沖縄というフィールドを俯瞰的・平面的な見取り図ではなく、社会的なレイヤーを立体的に示し、その重なりや重ならなさ、生活空間・社会関係としての「地元」との距離のあり様を淡々と表している。

そうした沖縄社会の姿を描きつつも、本書においては必ずしも沖縄社会の構造や変動について、性急な定式化やモデルの提示を行おうとするものではない。岸は序文でこう述べている。

「繰り返すが、私たちの調査は、沖縄そのものも、それぞれの階層の人びとをも、代表するものではない。ここにあるのは、私たちがたまたま出会った、小さな、ささやかな断片的な記録である。しかしこの「生活の欠片たち」を通じて、私たちがなりのやり方で沖縄社会を描こうと思う。その欠片たちには、それなりの「普遍性」があるはずなのだ。」(後略)(序文、13-14P)

本書は、序文、5つの章からなる本文、あとがき、で構成されている。

序文(岸)においては、各著者のこれまでの研究の経緯が述べられる。それらの先行研究から、本書で取り上げる対象を「安定層」「中間層」「不安定層」に大きく括り、さらに「不安定層」については、男女別に分けて考察することが説明される。この3つの層の特徴については、各章のタイトルが端的に示している。すなわち<地元>との「距離化－安定層」「没入－中間層」「排除-不安定層」である。こうした沖縄社会の多様性を示すにあたり、岸は懸念も示している。その点については後述する。

第1章「沖縄の階層と共同性」(上原)では、まず、各種統計や先行研究をもとに、沖縄における経済構造の特性や階層化、不平等性などが整理される。そして、「沖縄的共同性」なるものについて、社会学に限らず隣接分野の先行研究など広範囲の資料に当たり、その特徴や課題について言及している。そして、「沖縄的共同性を「沖縄内部の差異化・構造化」の視点からいかにして描きなおすのか。階層とジェンダーの視点を導入することで、従来の研究に対し

てどのような新たな知見を加えることができるのか」(第1章、P51)と本書が取り組むべき課題を明示する。

第2章「距離化－安定層の生活史」(岸)においては、公務員、教員、大企業従業員など沖縄社会において比較的上位の階層に属する人々の生活史が取り上げられる。「安定層」の生活史の特徴として、＜地元＞との人間関係の薄さ、進学・結婚など人生の節目における物理的な移動、あるいは＜地元＞を突き放したように語る見方・語り口など、＜地元＞という共同体的なものからの距離間が指摘されている(もっとも取材された話者のうち、女性については、若干他の話者との相違があるように、評者は感じる)。

第3章「没入－中間層の共同体」(上原)は、上原の中学・高校の同級生である“タカヤ”の生活史から始まる。彼は高卒で建設業や役所の臨時職員、飲食業などで働き、その後自営業を始める。その友人たちも同様にいくつかの職業を経験し、時にキセツ(県外の工場での派遣労働など)へ行く。そして、友人・知人のネットワークを通じて、店を開くための人材・資金・情報を獲得していく。職歴と良い人間関係のありようといい、最も「沖縄的」な生活をしているように見える層である。しかしそうした「沖縄的」とみられる共同性は、「(前略)那覇という都市空間で新たに掘り起こされたネットワークが含まれており、その共同性もまた、日々の経営実践によって再編されて続けている」(第3章、259P)のものであり、土着の、あるいは自然発生的な共同性とは「性格を異にする」と上原は指摘する。

第4章「排除Ⅰ－不安定層の男たち」(打越)は、建設業の現場で働く、「不安定層」の男性たちが取り上げられる。「中間層」が友人・知人といった横のつながり、中学・高校の同期といった共同性を核に、そこに埋没しつつ生活の資源を得るべく、そのネットワークを再構築し、拡大していくのに対し、「不安定層」の人々は、＜地元＞の「しーじゃーうっとう関係」(しーじゃーうっとう／年長者－年少者、先輩－後輩に近いニュアンスの沖縄語)という縦の関係に縛られつつ依存し、過酷な暴力と収奪の中で生きていく。打越の10年余りに渉る地道な参与観察をベースとして、その姿が活写される。

第5章「排除Ⅱ－ひとりで生きる」(上間)では、援助交際をしながら生活していた女性の語りが取り上げられる。女性は、家族や交際相手という最も近い関係のものからの暴力や剥奪にさらされている。タイトルにあるように、＜地元＞の共同体からの排除だけではなく、もっとも基礎的な人間関係からも、彼女は排除され、「ひとりで生きる」ことを強いられる。

あとがきにおいては、これら「安定層」「中間層」「不安定層」の語りを踏まえ、岸は「本書に収められた物語はどれも、限られた資源と社会的条件のもので必死に生きてきた人々の物語です。それらは、沖縄の戦後史や経済状況に深く規定されているという意味で、沖縄固有の人生の物語です。そして、それと同時に、与えられた環境の中で必死に生きているという意味では、とても普遍的な物語でもあります。」(あとがき、437P)と述べ、本書における個々の独自の語りがもつ普遍性を強調する。

本書で特筆すべき点と筆者が考えるのは、「安定層」を取り上げた第2章、「中間層」を取り上げた第3章である。第4章・第5章の不安定層と合わせて、これらの層の生活が示されることにより、沖縄社会について、「沖縄的な共同性」という視点からみえる平面ではなく、階層性やジェンダーという視点により側面から見ることによって、沖縄社会のレイヤーを立体的に示している。

この点について、岸は序文で下記のように述べる。

「(前略) 本書で描かれた多様性と複雑性は、ある種の「分断」として解釈されるかもしれない(後略)」(序文、21P)

しかし、安直な階層間やジェンダー間の線引きなど、何かを断定的に提示することは、本書では繰り返され、かつ慎重に避けられている。こうした慎重さは、岸が別著『はじめての沖縄』で述べているように「自分はだれなのかを問い直し、同時に、ただ単に問い直し続けるだけではなく、実際に人々と出会い「事実」を記録し続ける」という姿勢が、本書でも共有されているためであろう。そして、人々を隔て、括る、社会的な「境界線」を、隠ぺいするのでもなく、単純に批判するのでもなく、そこに「隔て」があることに気づく、まず認めることから考えることを、改めて本書は示唆する。

また、本書は、沖縄社会の多様性をスケッチするとともに、沖縄と日本、研究者と研究対象との関係や位置を自問自答し、かつ静かに他者へ問いかけるという意義もある、と評者は考える。ここでも立場性や権力性といった断定的な問いは慎重に避けられ、わたしーあなたといった、シンプルな関係をめぐる問いを、静かに放つという印象である。

これは著者同士の関係にも感じられる。本書の記述や各著者の著書などのプロフィールによれば、岸と打越は沖縄県外出身(ただし、打越は学生として沖縄での生活経験がある)、上原と上間は沖縄出身である。それぞれが沖縄というフィールドに対し、その中に存在する「安定層」「中間層」「不安定層」と、それぞれに独自の距離や位置をもっている。

個の生活に宿る普遍性。決して融合することなく、しかし関わり合わなければ成り立ちえない人間と、その人間が作り出す社会はどここの地域にもある。しかし、「地元を生きる」ものにとって、その属する〈地元〉の特殊性や普遍性は、「当たり前」であるがゆえに認識されがたい。その〈地元〉がもつ複雑で多様な共同性のありようを、各著者はそれぞれに調査対象と独特の距離や立場を持って聞き取り、総体としての沖縄社会の姿を描き出している。そうした、目の前の事実を見て、そこから考えるという姿勢は、下記のあとがきの記述につながるだろう。

「そろそろ私たちは、沖縄社会を「理解」しようとするときに、一枚岩的な共同体のイメージから抜け出して、ここに厳然と存在する階層格差という現実、あるいはジェンダー格差という現実を、直視する必要があると思います。」(あとがき、438P)

この指摘は大変にしんどい。評者は沖縄在住で、大学教員という仕事をする「安定層」で、「中間層」が営む居酒屋に行き、通勤途中のコンビニで「不安定層」の若者と行き会うような日々を送る。評者にとって、〈地元〉＝沖縄とは、意識的・無意識的に離れた場所であり、労働の場であり消費の場であり、島という物理的な広がり範囲で、否応なしに他者と関わる／関わらない、他者を見る／見ない、を選択し続けながら生きる場所だからである。調べるものが調べられる、調べられるものが調べる。その不安定さ、不安さ、見て見ぬふりの後ろめたさと、それを他者から指摘されることの不快さ、そうした複合的な感情というものはなんとも名状しがたい。地元で日々生きる者は〈地元で生きることを語る〉ことができるのか。

しかし、この問いについての答えは評者はまだ持っていない。

正確には、その勇気や覚悟、あるいは確信が持っていない、といえよう。

一言でいえば、語るものと語られるものが近すぎるのである。または重なっているかもしれない。沖縄という〈地元〉、家の近所の「地元」、大学の同級生がいる(地元)。さまざまな「わっ

た一」(われわれ)が、重なったり離れたりしつつ存在する真ただ中において、再帰的に、自省的にその属する社会を見直すことはいかにもしんどい。

地元で生きているものが、＜地元で生きる＞人々を語ることがしんどい。少なくとも「安定層」であると自分を認識している評者にとって、自分がいる＜地元＞あるいは属する共同体において、こうした階層格差やジェンダー格差を「うすうす」気づいてはいても、それを語ることが、自らの生活の成り立ちの確かさを不安定にさせかねない。格差の上に自らの生活が成り立っていることに気づきはしても、むしろうすうす気づいているからこそ、なお手が付けがたい。ただそうした意識は、階層とジェンダーのもたらす格差に対し、「しらんぷーなー(知らんぷり)の暴力」(知念ウシ)をふるうことにもつながるだろう。

しかし、岸が言うように、自らが生きる社会のあり様を直視することは、避けて通ることはできないであろう。なぜなら、私たちは見て、知ったからのだから。知った以上、生きにくさを抱える＜同じ＞＜シマンチュ＞を無視はできないであろう。なぜなら、今日、そこですれ違っているのだから。

もっとも、それらは単純なことであり、であればこそ困難なことでもあるのだが。

まだうまく評者も表現できないのだが、本書を読んで、調査する／される関係の非対称性や暴力性、医学という侵襲としての社会調査などということを考えた。これはまた別途調整して論じたい。

本書は、沖縄の人々の生活の断片を組み上げた精密なガラス細工のような研究であるといえる。ゆえに、著者らは欠片を扱うたびに指先を傷つけ、その指先の痛みを全身で感じ、痛みの意味を考えながら、欠片の集まりが形作る全体像を模索してきたのではなかろうか。ゆえに、長い時間と体を張った調査が必要であり、その時間の中で生まれた、著者らと語り手の対話や、著者同士により費やされた労力や喜怒哀楽が、それぞれに関係を築き、本書が組みあがっていったのであろう。そして、その試みは、沖縄を「理解」する、あるいは「わたしーあなた」が形作る、「われわれ」の社会を理解するための、新たな一つの像を確かに描いたと、筆者は考える。